

「人からではなく」

(ガラ1:1~10)

挽地茂男

2018.10.28 日本基督教団千歳丘教会

10月31日と言えば最近では「ハロウィーン」と答える人が多くなってきましたが、もともと、「ハロウィーン」は、10月31日を一年の終わりとするケルト民族のお祭りでした。この日はケルトの人々の秋の収穫祭の前夜祭で、邪気を払うために悪霊などを追い出す宗教的な意味合いをもった行事を行いました。カボチャちょうちん（ジャック・オ・ランタン Jack-o'-Lantern）は、その祭で使われる魔除けのなごりです。その後8世紀以降、キリスト教の「諸聖人の日（万聖節 All Saints' Day / All Hallows' Day）」と融合するようになります。キリスト教（カトリック教会）はもともと、5月13日に諸聖人を記念する「諸聖人の日」を祝っていたのですが、ケルト民族のいたアイルランドやスコットランドのキリスト教では、この秋の収穫祭に合わせて「諸聖人の日」を守るようになります。結果として11月1日が「諸聖人

の日（万聖節）」となり、その前の10月31日の晩を「イヴ」として守るようになります。「ハロウィーン」は、"All Hallows' Evening"、すべての聖人 Hallows の記念日の前の晩（イヴ）前夜祭という意味です。「ハロウィーン」はケルト系移民と共に世界中に広がって参りました。現在でもアイルランドでは、10月最後の月曜日が祝日となっており、ハロウィンを祝う習慣が最も純粹な形で残っているとされています。

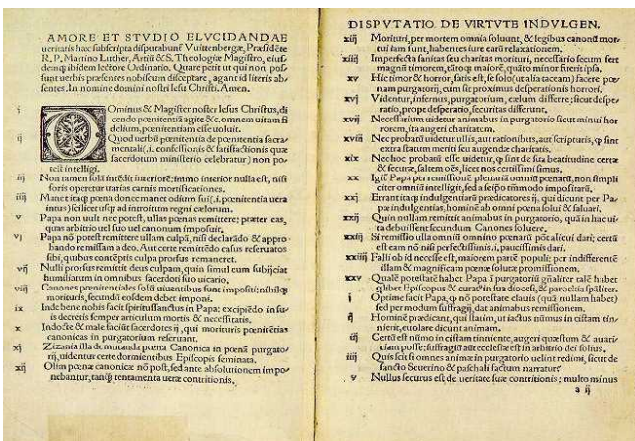


カトリック教会でも、ハロウィーンを教会暦に組み入れているのはごく一部で、禁止する国もあります。プロテスタント教会にはハロウィーンの習慣はありませんが、10月31日はプロテスタントにとってもっと大切な日として記念されています。つまり10月31日は宗教改革記念日なのです。多くのプロテスタント教会が、この日の直前の日曜礼拝を「宗教改革記念日礼拝」として守っています。この日は宗教改革者のマルティン・ルターがカトリック教会



に対する質問状、
「95箇条の提題」とよばれる
質問状〔当時は
大学のカリキュ

ラムの一環として公開討論がな
されていてその15のテーマ〕を、
1517年10月31日のこの日
にヴィッテンベルクの城教会の門
に打ち付けて〔とされているが
その証拠はない〕、宗教改革が始
まった日とされます。ちなみに昨
年は2017年で、宗教改革から
五百年の記念の年に当たり、私の



「95箇条の論題」

教えておりますルーテル神学校で
もさまざまな行事が催されてお
りました。

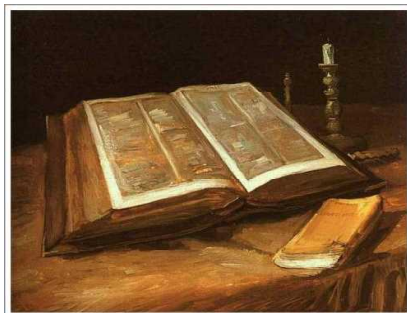
ルターの宗教改革は、ルターに
よる「福音の再発見」あるいは「愛
の神の再発見」を出発点として始
まります。その再発見に最も寄与
したのが、パウロの書いたローマ
の信徒への手紙とガラテヤの信徒
への手紙と詩編です。詩編の中
でも、今日読みました詩編の第4編
を、ルターは徹底して研究してい
ます。わたしはこのところ、ルタ
ーの書きました「95箇条の提題」
とその3年後に書かれた「キリス
ト教界の改善について」(1520)
という文章を読んでおりました。
この「キリスト教界の改善につ
いて」という文書には、カトリック
の教皇を頂点とする聖職者による
組織的な搾取の実態と欺瞞と腐敗
が連綿と書かれています。です
からこの文書を書いた前々年には、
ルターは異端審問にかけられ、ロ
ーマ・カトリックによる破門から
生命の危険へと追い詰められて行
きます。しかし彼が聖書を通して
理解した福音は、自らの置かれた
危機をも尻目に、キリストの教会
を福音にふさわしいものに、キリ

ストの教会をキリストにふさわしいものにしよう願うエネルギーの源泉だったのです。

マルティン・ルターは、もともと農夫（鋤夫説もあり）から身を起こして、鋤山業で成功を収めた父ハンス・ルダーと母マルガレータの次男として、1483年にドイツのザクセン地方の小村アイスレーベンで生まれます。起業に成功した父は上昇志向が強く、子供たちにもさらに上を目指すように、学問を修めさせます。父の願いに沿う形でルターは勉学に取り組みます。まずはルターはマンسفエルトの教会付属学校に通いました。ルターが13歳になると自宅から離れ、マクデブルク、ついでアイゼナハに学び、法律家になる学問を修めるために1501年にエアフルト大学に入学します（18歳）。成績優秀で父の期待するエリート・コースに乗るかに見えたが1505年に人生の最初の転機が訪れます。休暇明けに家を出て大学へ向かったルターは、エアフルト近郊のシュトッテルンハイムの草原で激しい雷雨に遭遇します。落雷の恐怖に、死すら予感したルターは「**聖アンナ〔守**

護聖人〕、助けてください。修道士になりますから！」と叫びます。

これがルターの人生における第一の転機となります。ルターの両親は修道院に入ることは大反対を



ゴッホ「開かれた聖書のある静物」

しますが、彼の意志は堅く、両親の願いを聞き入れるどころか父親

の同意すら得ずに大学を離れて、エアフルトの聖アウグスチノ修道会に入ります。

ルターは修道生活にもすぐ慣れ、祈りと研究の日々をすごします。1506年には司祭の叙階を受けます。叙階後の初ミサを立てる中で、ルターは弱く小さな人間である自分がミサを通じて巨大な神の前に直接立っていることに恐怖を覚えます。ルターの熱心な修道生活にも関わらず、罪を見過ごしにしない神の厳格な眼差しの前に、心の平安が得られず、いくら祈りを捧げて、罪の懺悔を繰り返しても神に対する恐れを取り除くことはできませんでした。そのようなルターを罪の赦しの確信と心の平安に導いていったのが、詩編

であり、ローマの信徒への手紙であり、ガラテヤの信徒への手紙がありました。

ご存じのように祈禱会では、ガラテヤの信徒への手紙を少しずつ読んでおります。一年かかって、やっと3章を読み終えました。今日はそのガラテヤの信徒への手紙からお話をさせていただきます。余談ですが、古代のガラテヤに住んでいたのは、移住してきたケルト民族でした。

さてガラテヤ書の1章1節は、パウロの他の手紙とは違って、緊張感のある書き出しから始まります。1節。「1:1 人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ。1:2 ならびに、わたしと一緒にいる兄弟一同から、ガラテヤ地方の諸教会へ。」何を言ってるのでしょうか。手紙の差出人のパウロは、自分の立場を確認しているのです。つまり使徒（*ἀπόστολος*）としての彼の立場は、人間の制度や人間の手によって与えられているのではなく、イエス・キリストと神が彼を使徒として立てた、と言っているのです。それが、パウロの奉仕の原点なのです。神が

立てたので、神の言葉を語る。教会に仕える使徒としての責任も神が与えられた、しかもその神について「キリストを死者の中から復活させた父である神」と呼ぶことによって、パウロの奉仕の力が、「キリスト



を復活させた神」から来ると考えているのです。それがパウロの確信です。自分の責任も

力も、神から来るのです。それがパウロの宣教の原動力なのです。それが同時に、今日の教会の奉仕と宣教の原動力でもあるのです。

3節でガラテヤの人々に神の「恵みと平和」を祈念し、5節で「1:5 わたしたちの神であり父である方に世々限りなく栄光がありますように、アーメン」と挨拶を閉じると、パウロはガラテヤの信徒に向かって、唐突に叱責を加え始めます。6節。1:6 キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。

ガラテヤの人々が「ほかの福音」(ἕτερον εὐαγγέλιον)へと変節してしまった、と叱責しているのです。パウロが自分の立場を確認し、自分の責任と力の原動力が「キリストを死者の中から復活」させた神から出ていることを手紙の冒頭で確認したのは、このためだったのです。パウロの課題は、真の福音(エウアンゲリオン)をガラテヤの人々を連れ戻すことなのです。ガラテヤ書の議論は、この福音(エウアンゲリオン)をめぐって展開して行きます。

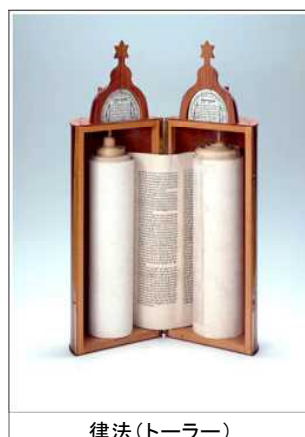
ガラテヤの人々の変節は、「キリストの恵みへ招いてくださった」神への離反なのです。「招く」という言葉(καλέω)は、人を特別な契約関係へと呼び出す神の恵みの行為を描写する言葉です(Cf. ロマ8:30, 9:11-12, Ⅰコリ1:9, Ⅰテサ2:12, 5:24)。パウロは、ガラテヤの人々が、彼が伝えたのとは異なる「ほかの福音」に乗り換えることによって、「キリストの恵みへ招いてくださった」神に背を向け、神から離反してしまった、と叱責しているのです。彼らは、単にパウロの宣教活動だけではなく、より根本的には、神の恵みに背を向けたと言っているのです。

では「ほかの福音」とはどのような福音なのでしょう。ガラテヤ書5章4節でパウロはこう語ります。「律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います。」

律法の問題は今日の箇所ではまだ前面に出ていませんが、「律法によって義とされ」る福音がこの「ほかの福音」のことなのです。この問題は詳しくは2章でより明らかになってまいりますが、先取りして申しますと、「ほかの福音」を宣伝

していた宣教者たちは、パウロが説いている「信仰による義」では不十分で、「律法による義」具体的には「割礼」を受けることによって救いが完成される、と説いていたのです。

しかし「ほかの福音」と言って



律法(トーラー)



渡辺禎雄「十字架上のキリスト」

も、当然、福音は別にあるわけではありません。7 節。

1:7 ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎないのです。

先ほど申しましたように、ガラテヤ書を読み進めてまいりますと、割礼を受けること〔により救いを完成すること〕を要求する別種の律法主義的「福音」が登場します。しかし、それは福音ではないのです。パウロがガラテヤの人々に宣べ伝えた福音は、異邦人にユダヤ教徒になることを決して要求しなかったのです。

「福音」(エウアンゲリオン)という言葉は、元来が戦勝報告〔有名な例はマラトンの戦いでのギリシア軍の戦勝を伝える戦勝報告〕という意味で使われていました。時々紹介する、紀元前9年のアジア州議会の決議を記録した「プリエネ碑文」と呼ばれる碑文には、聖書で使われるのとまったく同じ「福音」(エウアンゲリオンの複数形)という言葉も「救い主」(ソーテール)という言葉も出てきます。この碑文は、一年の始まり、

正月を、ローマ皇帝アウグストゥスの誕生日である9月23日に変更するという決議を記しています。一読いたします。

我らの生を神的な仕方で統治する摂理〔神〕は、熱意と大いなる御心をもって、アウグストゥスをもたらすことで、我らの生に最も美しい飾りを与えた。摂理〔神〕はアウグストゥスを、人々の幸福のために徳で満たした。彼は、我らと我らの子孫にとっての**救い主**(σωτήρ)として、戦争に終わりをもたらし、平和を作り出した。皇帝はその現われを通して、彼以前にすでに**福音**(εὐαγγέλια 複数形)を先取りした者たちのあらゆる希望を超越したので、すなわち彼以前に生きていた善行者を凌駕したのみならず、未来の善行者から、彼に先んじて何かをなすという希望をすべて取り去ったの



アウグストゥス

で、そして最後に、世界にとって**神**〔である皇帝〕の誕生日〔9/23〕が、彼に由来する**福音の始まり**であったので……。 (『東方ギリシア

語碑文選集』458、32-41行)

皇帝が軍事的に他国を圧倒することによって勝ち取る平和、その平和を知らせる良き知らせがこのアウグストゥスの「福音」の中身なのです。これもパウロが言う本当の福音ではありません。しかもこのアウグストゥスのもたらす「福音」はつねに複数形で語られます。それゆえこの名詞が皇帝礼拝で使用されている事実に対抗して、パウロ（そして新約聖書）はこの「福音」という用語をつねに単数形(εὐαγγέλιον)で使います。^{カエサル}皇帝の「福音」が福音なのではなく、キリストが与える福音こそが真の福音であり、^{カエサル}皇帝ではなく主イエスこそが神であるということを宣言する方法として、定着したのです。

福音という言葉の真の意味は、旧約聖書を背景にしています。旧約聖書のギリシア語訳〔紀元前3世紀から翻訳が始まり紀元前後に完成〕つまり70人訳聖書には、この「福音」という言葉が動詞形(分詞形)で使われます。イザヤ書52章7節。「それはまるで山々に美しい季節が訪れるようだ。それはまるで平和の福音を告げる

[εὐαγγελίζομαι] 者の足のような。それはまるで良き福音を告げる者のようだ。なぜならわたしは、あなたの救いを告げて言うからである。『おおシオンよ、あなたの神が支配される』と。」

イザヤ書の文脈で言われる「福音」はバビロン捕囚からの解放、解放に伴う神の支配と平和と自由の始まりの知らせです。福音とは、神がついに支配権を握って統治し始めたという勝利を宣言するメッセージなのです。新約聖書の福音は、旧約聖書を背景にしながら、人間の解放が、キリスト・イエスにおいて完全な形で成就した、と宣言するのです。

4節。1:4 キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとし



て、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。



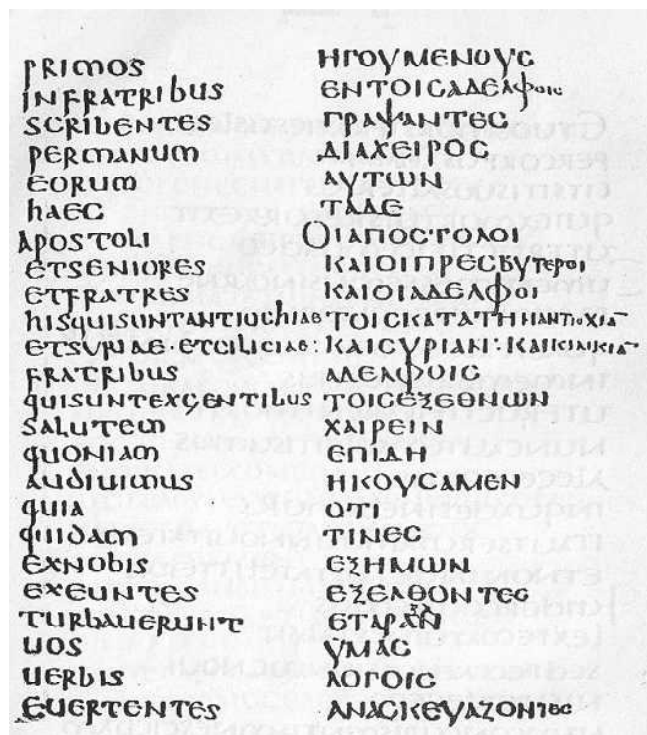
これがパウロの伝える福音のエッセンスなのです。キリストは、わたしたちをこの悪の世から救い出そうとして、わたしたちの罪のためにご自分の生命を献げられた。これが福音なのです。父なる神の御心によりキリストによって成し遂げられた救いと解放と自由を伝えるメッセージが福音なのです。

しかし、救いと解放と自由(5:1)を伝える福音のメッセージを曖昧にし、ガラテヤの人々を「混乱させる」者たち(οἱ παρασύροντες 新共同訳「ある人々があなたがたを惑わし」)が現れたのです。この人たちがどのような人たちであったのか——先ほどすでに申しましたが——さらに、使徒言行録を参照してみましょう。この箇所はガラテヤのことを述べているのではなく、アンティオキアでの出来事を述べているのですが、大変参考

になります。アンティオキアでかつてこんな事件が起きました。使徒言行録 15 章 1 節。「15:1 ある人々がユダヤから下って来て、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と兄弟たちに教えていた。」

アンティオキアにやって来た人たちは、ユダヤから〔つまり本家から、本山から〕やって来て、キリストを信じて「割礼」を受けなければ救われない、と教えていたのです。この問題を解決するためにパウロとバルナバはエルサレムに上京して、エルサレムの使徒たちと律法の問題について話し合ったのです。これを「(エルサレム)使徒会議」と呼びます。使徒会議では、異邦人は二三の原則的なことを守ることを指示して、割礼を受ける必要がないことを確認します。そしてエルサレムの使徒がアンティオキアの信徒に向けた書状をパウロたちに託します。その書状の中で、こう語ります。使徒言行録 15 章 24 節。「15:24 聞くところによると、わたしたちのうちの者がそちらへ行き、わたしたちから何の指示もないのに、いろいろなことを言って、あなた

がたを騒がせ (ἐτάραξαν) 動揺させたということです。」



使15:22-24 コーデクス・ラウディアエヌス写本（7世紀）羅希対訳

使徒言行録の「騒がせた」という動詞は、ガラテヤ書で「あなたがたを惑わ」したと訳されているのと同じ動詞です。ガラテヤに新たに到着した宣教者たちは、ガラテヤの人々に割礼を受けることを強要していた可能性があるのです。しかもエルサレムの本山の権威を振りかざしていた可能性もあるのです。

パウロはこれ——割礼を強要することによる律法への隷属の再導入——に黙っているわけにはいきませんでした。どちらを選ぶかは、本人の趣味の問題ですとは言えな

かったのです。それは福音の本質（自由）に関わる問題だったからです。パウロは激しい調子で語ります。8－9節。

1:8 しかし、たとえわたしたち自身であれ、天使であれ、わたしたちがあなたがたに告知させたものに反す



剣を持つパウロ

る福音を告知させようとするならば、呪われるがよい。1:9 わたしたちが前にも言っておいたように、今また、わたしは繰り返して言います。あなたがたが受けたものに反する福音を告知させる者がいれば、呪われるがよい。

耳を疑われるかも知れません。パウロは「呪い」を口にしているのです。使徒にあるまじき、とお思ひになるかも知れません。愛の人が口にすべきことではないと仰るかも知れません。現在であれば、信じる人の自由だと切り返えされるかもしれませんし、「パウハラ」（パワー・ハラスメント）「モラハラ」（モラル・ハラスメント）の対象とされたかも知れません。

「呪いあれ。」「呪い」という言

葉は、ギリシア語では〈アナテマ〉
(ἀνάθεμα) という言葉です。神
によって破壊されるべきものとし
て（時として献げ物として）引き
渡される物や人間をさしています。
パウロが伝えた福音と異なる
「ほかの福音」は神の御前に粉碎



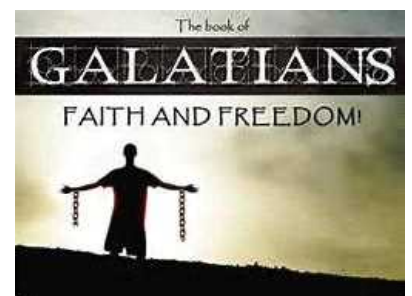
されるべ
きものだ
というの
です。こ
の思いが、
パウロの

激しい言葉となって、彼の口から
迸るのです。「呪われよ。」

そしてこの「呪い」は8節と9
節の二つの条件文によって、どの
ような条件の下で「呪い」が語ら
れるかが明らかにされます。8節
の条件文は、現実にはあり得ない
ことを条件として語る条件文で
す。「もしわたしが鳥だったら…」
「君の所に飛んでいくのに。」現
実には「鳥ではあり得ない」ので
すが、もしそんなことがあれば、
「わたしは…飛んでいく」という
形の文章になっています。

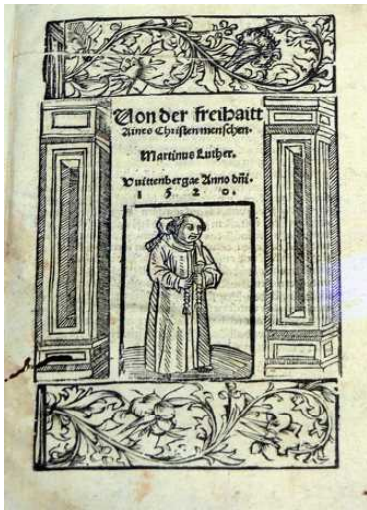
8節「1:8 しかし、たとえわたし
自身であれ、天使であれ、わた
したちがあなたがたに告げ知ら

せたものに反する福音を告げ知ら
せようとするならば」。「天使や自
分たちが告げ知らせたものに反す
る福音を告げ知らせ」というよう
ことは現実にはあり得ないことだ
けど、もしもあったとしたら、「呪
われよ」。9節の条件文は、現実
の可能性を視野に入れた条件文で
す。「この道をまっすぐ行けば、
駅に出ます。」AをすればBとい
う結果が出てきます、というよう
な単純な事実をのべます。「あな
たがたが受けたものに反する福音
を告げ知らせる者がいれば」これ
はガラテヤの教会の現実だったの
です。そんな人間が教会をかき回
すしているなら、「呪われよ」。こ
こでは、パウロはガラテヤの現実
・現状を念頭に置いて書いている
のです。パウロが伝えた福音を否
定するような福音の宣教者が登場
したのです。危機的な状況がガラ
テヤに生じていました。このよう
に信仰の根本がないがしろにされ
るとき、パ
ウロは全身
全霊でそれ
に対抗しま
す。全ての
隷属を持ち込むものに対して、自



由を宣言するのです。

そしてパウロはこの自由を愛によって仕えるために用いよ、と語ります。「5:13 兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。」これはルターの『キリスト者の自由』の命題につながる精神です。



ルター『キリスト者の自由』(1520)

「キリスト者はすべての上に立つ自由な主人なので、誰にも服従することはない」(深井智朗訳)。

そして自由だから

こそ、最も主体的に神と人にとに仕える下僕となることができるとして、ルターは続けてこう語ります。

「キリスト者はすべてに仕えることができる下僕であり、誰にでも服従する。」

自由人パウロも、神と人に仕える僕として生きたのです。10節。1:10 こんなことを言って、今わたしは人に取り入ろうとしているのでしょうか。それとも、神に取

り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、何とかして人の気に入ろうとあくせくしているのでしょうか。もし、今なお人の気に入ろうとしているなら、わたしはキリストの僕ではありません。

パウロは人々の聞きたがることだけを語る実用哲学者(ソフィスト)ではありません。彼はキリストの僕(δοῦλος)なのです。ひょっとするとパウロの論敵はこう言っていたのかも知れません。パウロは「何とかして人の気に入るために」自由を吹聴して、都合の悪い割礼という苦痛に満ちた神の要求を、ガラテヤの人々に語るのを避けた(スルーした)のだ。しかしパウロは、キリストの「僕」、文字通りは「奴隷」として自らを示します。

「奴隷」は主人の意志を行うのです、キリストに仕える僕・奴隷として彼は福音を携えて地中海世界を飛び回ったのでした。そのことによって人々の救いに仕えたのです。コリント信徒への手紙二11章23-28節は、パウロの宣教活動の苦闘を語ります。

11:23 「彼らは」キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、わたしは彼ら以上

にそうなのです。苦勞したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。11:24ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度。11:25 鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。11:26 しばしば旅をし、川の難、盜賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、11:27 苦勞し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありまし



た。11:28このほかにもまだあるが、その上に、日々わたしに迫るやっかい事、あらゆる教会についての心配事があります。

パウロはキリストの福音を宣べ伝えるために、生命をかけていました。それは主人の願い、キリストの願いを実現するためでした。キリストはそのために生命をかけたのです。パウロは「キリストの僕」「キリストの奴隷」なのです。古代の奴隷には動物と同じように「焼き印」が押されました。パウロは、宣教活動で彼が負った傷跡（II コリ6:4-5, 11:23-25参照）を、ガラテヤ書6章17節で「焼き印」と呼びます。「わたしは、イエスの焼き印を身に受けている」。パウロが自分の「身に帯びたイエスの焼き印」は、彼がキリストの所有する奴隷であるということを示す識別商標なのです。そのキリストが生命をかけて成就した福音のメッセージに、彼もまた生命をかけたのです。

イエス・キリスト、パウロ、ルター、福音は脈々と教会によって守られてまいりました。また今日に生きるわたしたちも、福音によって生きることを通して、さらに次の世代に引き継いでいきたいと思ひます。祈りましょう。

2018.10.28 日本基督教団千歳丘教会礼拝

1:1 人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ、

1:2 ならびに、わたしと一緒にいる兄弟一同から、ガラテヤ地方の諸教会へ。

1:3 わたしたちの父である神と、主イエス・キリストの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

1:4 キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。

1:5 わたしたちの神であり父である方に世々限りなく栄光がありますように、アーメン。

1:6 キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。

1:7 ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎないのです。

1:8 しかし、たとえわたしたち自身であれ、天使であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。

1:9 わたしたちが前にも言っておいたように、今また、わたしは繰り返して言います。あなたがたが受けたものに反する福音を告げ知らせる者がいれば、呪われるがよい。

1:10 こんなことを言って、今わたしは人に取り入ろうとしているのでしょうか。それとも、神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、何とかして人の気に入ろうとあくせくしているのでしょうか。もし、今なお人の気に入ろうとしているなら、わたしはキリストの僕ではありません。

[1] Παῦλος ἀπόστολος οὐκ ἀπ' ἀνθρώπων οὐδὲ δι' ἀνθρώπου ἀλλὰ διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ καὶ θεοῦ πατρὸς τοῦ ἐγείραντος αὐτὸν ἐκ νεκρῶν,

[2] καὶ οἱ σὺν ἐμοὶ πάντες ἀδελφοὶ ταῖς ἐκκλησίαις τῆς Γαλατίας,

[3] χάρις ὑμῖν καὶ εἰρήνη ἀπὸ θεοῦ πατρὸς ἡμῶν καὶ κυρίου Ἰησοῦ Χριστοῦ

[4] τοῦ δόντος ἑαυτὸν ὑπὲρ τῶν ἁμαρτιῶν ἡμῶν, ὅπως ἐξέληται ἡμᾶς ἐκ

τοῦ αἰῶνος τοῦ ἐνεστῶτος ποιηροῦ κατὰ
τὸ θέλημα τοῦ θεοῦ καὶ πατρὸς ἡμῶν,

[5] ᾧ ἡ δόξα εἰς τοὺς αἰῶνας τῶν
αἰώνων, ἀμήν.

[6] Θαυμάζω ὅτι οὕτως ταχέως
μετατίθεσθε ἀπὸ τοῦ καλέσαντος ὑμᾶς ἐν
χάριτι [Χριστοῦ] εἰς ἕτερον εὐαγγέλιον,

[7] ὃ οὐκ ἔστιν ἄλλο, εἰ μὴ τινές εἰσιν
οἱ ταρασσόντες ὑμᾶς καὶ θέλοντες
μεταστρέψαι τὸ εὐαγγέλιον τοῦ
Χριστοῦ.

[8] ἀλλὰ καὶ ἐὰν ἡμεῖς ἢ ἄγγελος ἐξ
οὐρανοῦ εὐαγγελίζεται [ὑμῖν] παρ' ὃ
εὐηγγελισάμεθα ὑμῖν, ἀνάθεμα ἔστω.

[9] ὥς προειρήκαμεν καὶ ἄρτι πάλιν
λέγω, εἴ τις ὑμᾶς εὐαγγελίζεται παρ' ὃ
παρελάβετε, ἀνάθεμα ἔστω.

[10] Ἄρτι γὰρ ἀνθρώπους πείθω ἢ τὸν
θεόν; ἢ ζητῶ ἀνθρώποις ἀρέσκειν; εἰ ἔτι
ἀνθρώποις ἤρεσκον, Χριστοῦ δοῦλος
οὐκ ἂν ἦμην.